

【桜川】 さくらがは (その1)

岸に桜の咲いている川、あるいは桜の花びらが川に流れる様を桜川といいます。

茨城県西茨城郡鉾柄峠西麓鏡ヶ池より筑波山西部を流れ土浦市で霞ヶ浦に注ぐ川に桜川と呼ばれる川があります。川沿にあたる岩瀬町磯部付近が謡曲『桜川』の舞台であったと伝えられています。

世阿弥作 謡曲『桜川』は日向国と常陸国を舞台とする狂女物です。

日向国に住むある女は人商人(ひとあきびと)から、我が子桜子が母の貧窮を見かねて身売りしたことを知らされます。

わが子を捜し求め、女は放浪のすえ常陸国桜川までたどり着きます。物狂いとなった女は、川に流れる桜の花びらを手網ですくい落花を惜しむのでした。

そこへ僧が供を連れてやってきます。その供こそ桜子であることがわかり、親子は再会を喜び連れ立って帰郷するという話です。

謡曲の中には、身売り、誘拐、出家など何らかの事情により離ればなれとなった親子の話が数多くあります。

『桜川』をはじめ『三井寺』『百万』『柏崎』のように母親が放浪のすえ、子と再会を果たす話もあれば、行方不明の母親を子が捜し当てる『飛鳥川』、子が父親を捜し当てる『歌占』『土車』『木賊』、父親が子を見つける『花月』、父親と不和の子との再会を描いた『弱法師』『雲雀山』、さらに『隅田川』は母が訪ねて来た時には子は既に命果て、亡霊となって現れるという話です。それにしても、このような親子再会譚とでもいうべき曲が多いのはなぜなのでしょう。

昔は身売り、誘拐など頻繁にあったのでしょうか、これらの曲はそうした事件性よりも、普遍的な親子の葛藤に主題があると思えてなりません。

親と思春期の子は何らかの事情により互いの心が向き合わなくなることがあります。

未だ自立しきらない子が親の愛から見離される場合、過保護な親の手から子が抜け出せない場合、子が親の行動に不信感を覚える場合など原因はさまざまでしょう。

こうした状況の中で心の安定を失った子の心は不安の闇を彷徨い、憤りや絶望感が発作のようにこみ上げてくるのです。

こんなとき、親が事態に気づき子の心を探し求めねば…。

こうした親子の修羅をこれら謡曲は表現しているのではないのでしょうか。

『桜川』などのように、生き別れとなった親子が再開を果たすという筋書きの深層には、こうした親子のもつれと親子関係修復の苦労が表されているのです。